

四人部屋

児玉 かつ 宮城

日溜りの金木犀のかたはらで癌の再発忘れてゐたり
再発の癌をにくめど時かけてわが育みしゆゑに諾ふ
四人部屋の八十代の女子三人わたしを待つてゐてくれました
四人みな同病なればうちとけて女はやはり年齢のこと
病棟は現世うつしよの縁（排液）のボトルをさげて水買ひにゆく

母のがっこ

佐々木 鏡 子 秋田

しやきしやきと酢醬油で食む菊の花かくしもつ邪氣うすれるやうに
ふかふかの落葉に座り葉ずれ聞く今日のわたしは時間の長者
鳥海山に初冠雪がありし日のタイヤ交換三時間待ち
初めての美容院にてカットする小春日和の小さな冒険
飯台のま中にでんと置かれるき母のがっこが山盛りの鉢

黄玉婚式

大西 淳 子 * 千葉

金銀におよばずされど今ひかる公孫樹もみじのひとひらの燦
やわらかくなりたる秋の陽をあつめサンキャッチャーはやさしくなりぬ
若き日はこころに虎を住まわせておりしも今はマリモと暮らす
アプリではマッチングされそうもないあなたと暮らし十六年過ぐ
暑くなくまだ寒くない常温のこの日黄玉トクメ婚式迎ふ

フラッシュユバック

松下菜水

神奈川

雷光に浮かび上がれる景のごと虐待の恐怖フラッシュユバックす
雨の音、窓震ふ音、怒鳴りごゑ、鞭の音 からだが動けない
鞭の先しなりて傷みより先に熱さがわれのからだ奔りき
泣きじやくるわれに夫が起き出してココアを甘く淹れてくれたり
テディベアを抱きしめ眠れ早色の記憶のなかの子供のわたし

秋の陽

奈良橋 幸子 東京

アウンズの声はバリトン吉祥寺駅までをわが耳は聴き惚る
吉凶の吉だと言ひてぬぐひやる少年の頭の鳥の糞、秋
煙突が在りし高さに目をやりぬ「あけほの湯」の字見えぬ空見ゆ
友の家建ちかはれるを門の辺の無患子黄なる実を落したり
秋の陽は失ひしもの呼び醒ます目陰のかたにたれか立ちたる

切り火

能勢 玉枝 東京

木星の炎めきたるかがやきを晩秋の夜の底ひに眺む
涙ぐむことのやさしさ遠のきてゆかむかドライアイのこの目は
再診へ向かふ夫に「おまえさん、行っておいで」と切り火の真似す
縁起良き色くれなるの深みゆく百両、千両、万両の実よ
あれこれと気ばかり逸る季節来てまづ家ぢゆうのカーテン洗ふ

枇杷色のベスト

今村 日出子*長野

友達になつてとナツツ差し出せばブナの枝よりヤマガラ飛び来
窓ガラスつつくヤマガラ枇杷色の小さなベストで今朝もあらわる
ジョウビタキ橙色のシャツを着て人界の秋見回している
指の皮膚切つてしまえどマリモ羊羹みたいにつるんとむけたりしない
つぎつぎと轆かかっているか雪道に失くしたわれの青き手袋

霧笛

河合 育子 愛知

親子熊撃ちたるニュース読む人もわたしも熊のうつろな顔す
栗ごはん栗きんとんはほくほくと熊の分かもしれないぬ栗の実
ものおもふ秋のわたしの胸ふかく霧笛ひびかせ渡りゆく船
陽のひかりふうわり丸めしやぼん玉吹く子よ風があきかぜになる
風の中ゆらりと歪むしやぼん玉たまゆら映る戦火の子らが

ボディーブロー

森田 治生 三重

言ふことを聞かない孫に言ふことを聞かなかつた子が説教してる
そのときは糸を垂らしてくれと言ひ黄金蜘蛛の巣壊さず通る
「二度目まして」「卒業ぶり」などといふことば耳に障れど耳に残れり
谷村新司、もんだよしのり同世代の訃報がボディーブローとなりぬ
M—1を見て声あげる八歳よ笑へ今なら笑へる笑へ

千年を掘りだす

桑原

博 大阪

群雀とびたつときに聞こえる羽音にわづか重さのまじる
親鸞の話す言葉がちよつとした重さになりて背のリユックにあり
月曜日にポップコーンを食べながらゴジラを見るは爺さんばかり
遠からず電が降りだすとメールする天武天皇の歌おもひつつ
千年を重機ではらひ串や刷毛に掘りだす緑釉陶器のかけら

パスワード

則武博子

兵庫

星になどなるはずなしと知りつつも亡き人おもふ星を仰ぎて
エンディングノートに記すパスワード英字数字をスパイのやうに
ちぎれぐも自在に浮かぶ秋の空けふの歌壇欄に共選あらず
〔太陽〕にへなないろ〔花咲く〕ネーミングなべて明るし生命保険
ユニクロのヒートテックに包まれて八十八回目の冬に入る

釣りカレンダー

大西晶子

福岡

枯れ色の混じる草生に発光をしつつ咲き出づ黄のつはぶきは
嚙下する力がすこし戻りたる夫に芋煮る仕上げは柚子で
飲食に体力が要ると知らざりき夫が嚙下に苦しむまでは
半年のリハビリが効きけふ夫は白身のさしみと桜もち食ぶ
釣り友の部谷さんが夫に持ちくれき章魚、鯛をどる釣りカレンダー